

〔第14回学術集会シンポジウム〕

## 介護に消極的な家族を支援する粘り強いアプローチ ～介護老人保健施設での実践例～

青森中央短期大学看護学科

中川 孝子

【はじめに】 私は、老人保健施設・在宅看護領域での実践経験から、利用者と家族を一つの単位としてケアすることの重要性、そして粘り強くアプローチすることの必要性を強く感じてきた。今回、在宅での介護力不足から、家族介入が困難だった事例について、家族関係ならびに基盤となる介護力を再検討したので、その経緯と内容を報告する。

【事例概要】 事例のA氏は要介護4の82歳の女性で、平成17年12月、右大腿骨骨折にて人工骨頭置換術を受けた。その後、自宅退院するが寝たきりとなり、両大転子部など4カ所に褥瘡が発生した。A氏は夫と死別しており、同敷地内に住む長男と県外に住む長女と次男の子どもが3人おり、この時点では、長男夫婦が主たる介護者であると判断していた。

【経過】 寝たきりになってからは、食事動作は一部介助、排泄は尿便意なく紙おむつを使用、日2回のホームヘルパーによる食事の支度、食事介助、おむつ交換等が行われていた。入浴は月2回の割合でデイサービスにて行われ、家族の関わりは、長男の妻による買い物のみであった。長男の妻は県外在住の長女に気を遣っている様子が伺えた。

平成18年5月より訪問看護を通じての家族へのアプローチが開始された。その時点での問題点として、①食事日2回のみ ②おむつ交換日2回③入浴が月2回などが挙げられた。そこで、家族への提案として、清潔保持やおむつ交換時の家族介入を申し入れた。しかし、長男の反応は、「うちの家内にはそんなことは……」という発言で、できない、したくない、させたくない、いずれの意味なのか不明のまま、

家族介入はこれ以上期待できないと感じた。訪問看護指示書は褥瘡治療が中心であったが、在宅での褥瘡発生因子の除去が不十分であり、褥瘡が悪化したため短期入所を勧めた。長男の反応はスムーズなものであった。2週間の短期入所中に褥瘡4カ所中3カ所は治癒した。一時帰宅したが、長男の希望もあり、平成18年6月末より再入所となった。入所後の家族への働きかけとして、自宅洗濯による週2回の面会の確保、リハビリや褥瘡の処置の見学の促し、ケアプランの説明を根気強く行った。平成19年5月退所が決定したが、長男は在宅復帰の準備に協力的で、A氏の健康状態への気配りもみられていた。再度、在宅復帰後の家族の協力を申し入れたが、長男の反応は前回と同じで「うちの家内にはそんな事は……」というもので、しない、できない、させたくないのか困惑するものであった。入所後長男は協力的な反応をみせていたにも関わらず、在宅復帰後の家族介護の介入には消極的であった。現在はケアへの協力が得られるよう継続して粘り強く関わっている。

【考察】 今回の事例を振り返ると、結果的には家族の介護介入までには至らなかった。しかし、入所による環境の変化を提供することにより、当初から発言に違和感のあった長男にいくらかの変化がみられた。これは粘り強く関わることで、家族関係に潜むケアユニットのねじれが是正された結果と推測する。我々が関わる本人と家族がもつ違和感に対しては、時間をかけてじっくりと粘り強い関わりをすることが重要となる。